



1

土左衛門になる前に助けられてしまった。悔しいやら情けないやら……。どうしていいか分からないが、いつまでもこうして、のうのうと寝ていられないことだけは確かだ。末吉はそろりと上半身を起こした。したたかに千曲川の水を飲んだので胸のあたりが気持ち悪いが、薄い夜着をはねのけて布団から這い出した。枕元には、長脇差や三度笠など、末吉の荷物がまとめて置いてある。

まだ外は暗いし、客室のある二階は静かだ。そっとふすまをあけて階下をのぞいたら、かまどの火が赤々と燃えており、食器をならべる音が聞こえてくる。さすがに旅籠の朝は早い。これでは、階下へおりて人に気づかれずに逃げだすのは無理だ。

障子を閉めたとなん、階段を上がってくる足音がした。あわてて布団にすべりこむ。ふたつの足音が末吉の部屋の前で止まり、低く呼びかける声が出た。

「お客さん……起きていなさるだかね」

この旅籠にわらじをぬいだときから、あれこれ世話をしてくれている女中さんの声だ。

「へえ……」と答えると、静かにふすまが開き、ふたつの人影がすべりこんできた。女中さんが枕元に置いたお盆か